



# Beyond Borders

## 渋谷敦志写真展

世界各地で「境界を生きる人々を記録し、分断を超える想像力を鍛えること」をテーマに撮影をしている写真家・渋谷敦志氏の写真および関連図書を展示します。

### リアル展示

※学内者限定

■2021/10/22(金) ▶ 11/12(金) 神田10号館13F Knowledge Base

■2021/11/19(金) ▶ 12/10(金) 生田 9号館3F 図書館本館

※時間・休館日は図書館カレンダーに準じます。詳細は専修大学図書館ホームページをご確認ください。

### オンライン展示

※期間中は学内・学外者を問わず広く公開します。

■2021/10/22(金) 9:00 ▶ 12/25(土) 12:00

[https://www.senshu-u.ac.jp/library/2021\\_autumn/top.html](https://www.senshu-u.ac.jp/library/2021_autumn/top.html)



# Beyond Borders

どうしても置き去りにできない眼が、そこにあった。一方的に見ていたはずのその眼が、逆にこちらの眼を見つめ返し、「お前は何者なんだ」「なぜ撮るのか」と無言で問いかけてくる。見つめ、見つめられ、まなざしが交差する十字路で何度も立ち往生し、揺らぎ、ときに挫折した。

日本社会で自分がひたる微温的な日常から遠くかけ離れた、苛烈をきわめる世界各地の窮状の地へとカメラを持っておもむき、想像を絶する人生の時間を生きてきたれかと出会う。暴力や貧困、差別や無関心など自分ではどうにもならない不条理に追い詰められた人びとは、キャンプやスラム、監獄や収容所などと呼ばれる抜き差しならない環境に留め置かれ、容赦ない生きづらさを強いられている。

そうした「隔離の中の生」に、写真家として生身の身体と眼を通じて向き合うたび、乗り越えるべき境界線は、自分の外ではなく、内にこそ引かれていることに気づいていった。

隔離の外の安全圏で生きていると思い込んでいた自分も、すでに現代の文明社会の自閉的なシステムの囚われの身なのかもしれない。そんな自己隔離の獄から脱出し、見えない境界線を繰り返し越境することで、一人ひとり固有の名前とまなざしを持つ「人間」に邂逅したいと願ってきた。

困難を生きる人びととわかりあえないことに絶望し、打ちのめされることもある。それでも、打ち震えるカメラを相手に差し向け、“あなたのことが知りたい”と心の扉をノックし、人間の生のリアルに迫る。そんな行為を愚直に続ける中で、目の前にいて向き合う人の「生きる」の片鱗が、そっと分け与えられることがある。こうして贈られたものを手がかりに、人と人とのあいだに分断する境界線を引くのではなく、共にいられる場所を開いていくことはできないだろうか――。

突然、降りかかった未知のウイルスによる感染症の世界的流行<sup>パンデミック</sup>という災禍が、人と人との物理的にも精神的にも引き離すいまこそ、「ここではないどこか」へ臆さずに移動し、他でもない「あなた」と対面する営みを写真行為の出発点にすえなおし、意志を持って「人びとのただ中へ」と踏み込むことの意義を問い直したいと思う。

なぜなら、自分にとってはそれだけが、決して失うべきではない、人間を人間たらしめる何かを覚醒させるたったひとつの方法だから。

# フォトジャーナリズムという力

写真の力は無限大だ。その瞬間の人・出来事・風景を切り取ることで、その人の内面や人生、生活や社会実相、そして時代状況までをも映し出す。もちろんそこには、撮る者=フォトグラファー（写真家）の歴史観、人間観、社会観、その前提となる専門知識や問題設定力、時には経験値が必要なことはいままでもない。それらを、撮影技術や感性といった表現力を駆使し、これらすべてが凝縮されることで一個の表現物として私たちに提示をすることになる。

ただしここで問題になるのは、受け手の私たち自身の「力」だ。見る者がその写真を通じ、何を感ずることができるかが問われることになる。もちろん、戦争の悲惨な写真を見れば戦争を憎み、平和を願う気持ちが生まれるということはあるだろう。震災被災地の写真を見て、一日も早い復興を願う防災の気持ちを高めるのは自然な感情だ。これは人として自然のありようともいえる。しかしそれだけではなく、もう一歩進め「写真の、その先」を見てほしい。それを読みとく力を持ってほしいと願う。

飢餓の写真を見て、単にかわいそうと思うだけでなく、そうした状況がなぜ生まれたのかに思い馳せることができるかどうか、状況を変える力に繋がるからだ。そのためには、ちょっとした最低限の知識、いま世界中で起きていることに対する社会的関心、そして想像力が求められる。そしてこれらの「力」はちょっとしたきっかけで大きく広がる。そうした思いから、今回の写真展の「関連図書」を館内に展示、紹介している。テーマに分けてお示しする文献は、もちろんそうした皆さんの関心に応えるには十分ではなからう。その欠けたピースを埋めることこそが「学び」であって、本を読む、集会に出かける、旅に出るといった、皆さんの様々な行動を期待したい。

そうはいってもコロナ禍の中で、私たちの社会への窓口は限定されがちだ。その結果、どうしても「新しい世界」に接する機会が少なくなるし、アフガニスタンやシリアをはじめ、ミャンマーやチベット・香港といった、すぐそばのアジアの国々の情勢ですら、遠い国で起きている「他人事」であって、気に留めることも、ましてやそのニュースを深読みすることもめったにない。しかし、日本の国内で起きた愛知の入管施設で起きた人権蹂躪じゅうりゃくの死亡事件や、ベトナムをはじめとする技能実習生の悲惨な日常は、世界各地で日々起きている難民・移民問題そのものである。

今回の写真展はまさに、こうした世界各地の「ボーダー（境界線）」を紹介するものだ。1点1点に、その「事実」の重みを感じるとともに、こうした24点の組み写真によって、よりいっそう世界が直面する課題の重さを感じることだろう。そしてまた、こうしていま世界中で現在進行形で起きている事象について知ることが、いま日本で起きていることを考えるきっかけにもなるし、また、より大局的に社会を少しでも良い方向に変えていく力を生むことにもなるだろう。

写真展の開催を快くお受けいただいた渋谷さんは、今年度の「フォト・ジャーナリズム論」講師で、学生を魅了する講義をさせていただいた。

さあ、世界を舞台に活躍する、日本を代表する写真家・渋谷敦志の写真力（フォトジャーナリズムの力）に、触れ、感じ、そして大いに楽しんでほしい。



## 展示の構成

展示写真は全 24 点です。

写真が撮影された地域によって、4つのセクション(1.アフリカ、2.アジア、3.日本、4.ブラジル)に分けて展示しています。

写真から浮かび上がってくる様々なテーマについて、「紛争問題」「難民問題」「民族問題」「災害の地で生きる」「子どもたちの暮らし」という5つに大きく分け、各写真が持つテーマ性をそれぞれのキャプション近くに表示しました。

「子どもたちの暮らし」テーマには貧困や児童労働、教育の問題も含めています。

### 【アイコン説明】

	紛争問題
	難民問題
	民族問題
	災害の地で生きる
	子どもたちの暮らし (貧困、労働、教育)

## 1.アフリカ



標高 3,000 メートル近い山岳地帯に暮らす高地人の家族《エチオピア、1999》



反抗した見せしめに反政府勢力に腕を切られて病んだ男《アンゴラ、2000》



\*アンゴラ内戦：アンゴラで 1975 年から 2002 年まで続いた、独立後の指導権をめぐる内戦。アンゴラでは 1975 年にポルトガルから独立して以来、ドス・サントス大統領率いるアンゴラ解放人民運動 (MPLA) と、ヨナス・サビンビを議長とするアンゴラ全面独立民族同盟 (UNITA) との内戦が続いた。2002 年サビンビの戦死により和平機運が高まり、政府と UNITA など反政府勢力との停戦協定が調印され、内戦は事実上終了した。



飢えて母乳が出ない 23 歳の母と栄養失調に苦しむ 8 ヶ月の赤子《アンゴラ、2002》



かつて虐殺を逃れた難民たちが歩いた道を自転車で駆け抜ける若者《ルワンダ、2007》



\*ルワンダ大虐殺：1994 年、ルワンダで起きた大虐殺。78 年、フツ族のハビヤリマナが大統領となり、フツ族中心の独裁政権を強化した。以来、難民となったツチ族が隣国ウガンダで武装化するなかで、94 年同大統領が暗殺される。その直後からツチ系の反政府組織ルワンダ愛国戦線 (RPF) がウガンダから侵攻し、報復を恐れる民兵などのフツ系住民によって、50 万人から 80 万人と推定されるツチ族や穏健派のフツ族が殺害された。



長引く紛争で飢饉が発生し、首都モガディシユは地方からの飢えた避難民で溢れた《ソマリア、2011》



\*ソマリア内戦：ソマリアは1960年に北部が英国から、中南部がイタリアから独立・合併して誕生したが、91年に反政府武装勢力の攻勢で政権が崩壊し、内戦状態となった。93年に国連初の平和執行部隊が展開したが失敗し、95年に完全撤退した。2000年以降、暫定政権が樹立されたものの、不安定な情勢が続いている。長引く内戦で、国民の大半は貧困状態に置かれている。



難民への食糧配給が行われた小学校では、飢饉とは無縁の学校生活があった《ソマリア、2011》



性器切除の痛みに耐えた“褒美”に飴をもらった避難民の女の子たち《ソマリア、2011》



助け合って生きるエイズ遺児の兄弟。あしなが育英会が作った識字教室で学びながら小学校へ復学を目指す《ウガンダ、2010》



ナンサナの丘の上のステージにドラムの音が鳴りひびく。  
子どもたちは服を脱ぎすてて、はだしでおどる。  
大きな夕日がスポットライト。  
ステップをふむ、とびはねる、腰をふる。  
汗がレンズに飛んでくる。

「生きてるんだ！ ぼくたちは生きてるんだ！」  
いのちの声がおどっている。  
(渋谷敦志『希望のダンス』/学研教育出版より)



「石油はなくてもいいが水がなければ生きていけない」。限られた水源を分かち合う大人たちの姿を、子どもたちは見て育つ《スーダン、2017》



\*スーダンの経済事情：スーダンは典型的な農業国であったが、石油輸出が開始された1999年以降、経済構造は大きく変化した。石油のおかげで、国内総生産は124億ドル(2000)から376億ドル(2006)へと増加し、石油は経済ブームをもたらした。石油による経済ブームは、新興の中流・上流階層を生み出したが、発展は首都ハルトゥームに集中している。首都は、300万~400万人の国内避難民を抱え、貧富の差が著しい。国民の多数は、十分な食料、清潔な飲料水、教育や医療のサービスといった、基本的必要が満たされていない状態に置かれている。



ジュバの小学校での国歌斉唱。内戦下では多くの子どもが教育を受けることができなかった《南スーダン、2013》



\*南スーダン内戦：南スーダンは、2011年にスーダンから独立したが、13年、政権内でキール大統領派と反大統領派の権力闘争が激化し、これをきっかけに内戦状態に陥った。両派は18年に和平協定を結び20年には統一政府が発足したが、国内では現在も紛争や暴力が続いている。



アパルトヘイト時代に黒人を隔離して住ませた旧「ホームランド」にある小学校では、今も教育格差を埋めることができていない《南アフリカ、2013》



\*アパルトヘイト：南アフリカ共和国で行われてきた、白人支配者層による有色人種に対する人種差別・隔離政策。1948年に法制化され、91年に法的には廃止された。

変わり続けるアフリカの地で、人々は実際にどのように厳しい現実を生き抜いているのでしょうか。写真を選ぶ過程で浮かび上がってきたテーマは、人間はひとりでは生きていけない、ということでした。これをうまく表す言葉を考えていた時、「あなたがいるから私がいる」という意味の”Ubuntu”(ウブントゥ)という言葉が南部アフリカで使われていることを知りました。同時代を生きる人間として、アフリカも日本もUbuntu でつながっている、そういう願いをタイトルに込めました。今この文をケニアから南アフリカに飛ぶ機内で書いていますが、もう一度自分に問うてみます。なぜアフリカなのか。明確な答えはないのですが、ひとついえることは、アフリカに生きる人々の写真を撮っているときの私は生き生きしている、ということです。アフリカの人々のむき出しの生が自分を裸にし、人間としての感受性をヴィヴィッドにしてくれるようです。そして、ごくまれにですが、目の前に写真の神様が降りてきたかと思うような光景に巡り合い、心が洗われるような解放感を味わう瞬間があって、アフリカの囚われたイメージがときほぐされて、体全体でアフリカを感じているのです。そのときに、ファインダー越しにフォーカスしているのはいつも人間だったのです。人間を想うこと、人間を想わせる写真を撮ること。その方法をアフリカで学んでいるような気がします。

(渋谷敦志/写真展 『Ubuntu, I am because we are』より)

## 2.アジア



サリー工場で見習いをしている12歳の少年。午前に2時間だけマドラサに通う《 Bangladesh, 2009》



\*サリー：インドなどのヒンズー教徒の女性が身につける衣装。

\*マドラサ：もとはイスラーム諸学を学ぶための高等教育施設を意味したが、現代では、イスラーム教育のみならず、一般教科も教える学校的な側面を持つマドラサもある。 Bangladeshには、宗教教育と近代的な一般教養を同時に教育し、教育省マドラサ教育委員会の管轄下にある「アリアマドラサ」と、宗教教育を中心とし、政府管轄外にある私立学校である「コウミマドラサ」の2種類がある。



溶接工場に住み込みで働く子どもは見習いのため賃金をもらえない《 Bangladesh, 2009》



どんな国にいても、どんな過酷な環境にあっても、子どもの変わらない姿があった。(中略) 子どもはナチュラルな存在だということ。子どもの頃は国境なんて関係なかった。言葉や文化の違いは越えられない壁でも争う理由でもなかった。それが、いつの間にか心の中にボーダーをこしらえてしまって、ナチュラルに人と出会い、ナチュラルにいのちと向き合うことを難しくしてしまっている。撮影した子どもたちの写真と向き合っているとつくづく思う。見ているのは子どもたちなのだ。

(渋谷敦志/国境なき子どもたち写真展『Four Wishes-世界の子どもたち-』より)



生まれてすぐに難民になったカレン人の少女は、今も国籍も帰る故郷もなく転々と暮らす《タイ, 2008》



\*カレン人(族)：ミャンマー南東部・タイ西部の山地に住む少数民族。ビルマ独立の際より続いてきた政府との紛争のなかで大量の難民が発生。タイとの国境にある難民キャンプには、約10万人のカレン族がいる。



政府軍に迫害され、タイとの国境に近い避難民キャンプに逃れてきた女性は、キャンプ内の小さな診療所で男児を出産した《ミャンマー, 2010》







増える難民を受け入れる土地を作るため、伐採した木々に火入れする避難民《ミャンマー、2010》



授業の休み時間にインダス川の側で遊ぶ子どもたち。洪水で学校と村の一部が流されたが、国境なき子どもたちが支援したテントで学校を再開した《パキスタン、2011》

\*パキスタン洪水：2010年7月、パキスタン北西部を中心に降った豪雨により引き起こされた洪水。洪水はインダス川に沿って拡大し、国土の5分の1が被害を受けた。



### 3.日本



津波で壊滅した南相馬市の萱浜地区で、原発事故の影響で救援がないなか、自力で行方不明者を探す消防団。中央下の上野敬幸さんは津波で両親と子ども二人を失い、父親の喜久蔵さんと長男の倅太郎くんは今も帰らないままだ《福島、2011》



自宅跡の側に地蔵を建てた木村紀夫さん。福島第一原発から3キロにあった大熊町の自宅は津波で流され、父親と妻、次女を失った。ずっと行方不明だった次女の汐凧さんは昨年末、見つかった。木村さんの捜索を手伝ってきた上野さんは「なぜ5年9ヶ月もかかったのか。国も東電もいのちと向き合おうとしなかった」と悔しがった《福島、2013》



結局のところ、君の悲しみはどこまで行っても君だけのものなのだ。でも、このまま君が歩くなら、僕も歩こう。君が疲れたなら、僕も一緒に休もう。今はただ自分の思うように精一杯生きてみたらいい。目の前に続く一本道は長い。とことんお供させてもらうよ。だから今は……。

僕は遠くからシャッターを切りながら「生きろ、生きろ」と心で念じた。



## 4. ブラジル



20歳のときに1年間、研修生として働いたサンパウロのセントロ地区《ブラジル、2014》



リオデジャネイロのファヴェーラ（スラム街）で行われたキリストの復活劇《ブラジル、2015》



Cara Beth,

ベッチ、久しぶり。きのうリオの裏山<sup>モーロ</sup>の「息切れ坂」を登った。夕暮れ時から夜になるまで、火ともし頃のモーロの家々が闇に沈んでいくのを見ていた。崇高な夜の到来だった。びっくりするほどの静けさのなかで、子供たちの叫び声だけがこだましていた。不思議なことに、「夢が潰えていく……」という声には聞こえてしまった。空耳にちがない。この国で、子供がそんなふうに叫ぶことは、絶対にはないはずだからね。

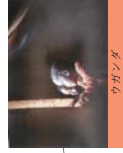
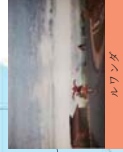
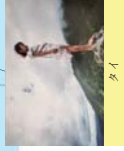
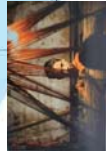
三日月が岩山の黒い影の傍らにかかっていた。美しく輝き、光の屑を貧しい家々の屋根にふりまいていた。水溜まりには月の影が映っていた。のぞき込むと、ぼくの足下が宇宙になった。水鏡の宇宙はぼくを空へと奪い去り、天空に浮かぶ漆黒の泉の底に投げ入れようとした。昇りながら、ぼくは沈んでいった。逆さまの世界で、すべてのものの影が本体となつてうごめくを見た。鷲は大蛇になった。ジャボチカバの実は見事な黒珊瑚だった。憎しみだと思っていた心が、愛なのだと分かった。

暗い海に浮かんで我を失っていると、不意に犬が吠えた。鯨の鳴き声ではなかった。地上の犬、モーロに暮らす野良犬が、きょう一日のひもじさに堪えかねて嗚咽をあげたのだ。豆粒のようなあばら家の群が、無言で野良犬に答えた。待っていて。きょうがだめでも、明日には必ず。明日がだめでも、明後日にはきっと。優しい家々は方舟だった。いざそのときが来れば、すべての住人とすべての野良犬を乗せて、その方舟は海にのり出す決意なのだった。大洪水で都会が沈んでも、岩山にはりつくモーロの家々は最後まで残るシェルターだった。そこから、緑色とカナリア色の旗を押し立てた方舟が、世界の再生に向けて船出するのだ。いつか、かならず。

ベッチ、聴こえるかい。天上的なヴィオランの音が岩山の上で鳴った。海はゆっくり深呼吸した。朝霧の影のなかで、言葉の種子が飛び散った。世界が一人の黒いオルフェウを受胎した。ブラジルの記憶がまた一つ生まれた。

（今福龍太「オルフェウの受胎—ブラジルへの絵葉書」/ 渋谷敦志『回帰するブラジル』/瀬戸内人より）

# Beyond Borders 撮影地





## オンライン展示のご案内

本展示はオンラインでもご鑑賞いただけます。

オンラインではテーマ別で写真を展示しています。ぜひご覧ください！

[https://www.senshu-u.ac.jp/library/2021\\_autumn/top.html](https://www.senshu-u.ac.jp/library/2021_autumn/top.html)



オンライン展示は

12/25まで

## 関連図書展示のご案内

関連図書展示コーナーでは、渋谷氏の写真から浮かび上がってくる「紛争・難民・民族問題」や「災害の地で生きるということ」、「子どもたちの暮らし」といったテーマに関する図書館所蔵資料を展示しています。これらの本をきっかけに、世界の現状や今後の社会について関心を広げていただければと思います。また、渋谷氏の著作や、氏が影響を受けた写真家の本を「写真家・渋谷敦志氏の軌跡」としてまとめました。「フォトジャーナリズム」が伝えることとは何か、より広く深く触れていただけるような資料もご紹介しています。貸出もできます(一部資料を除く)ので、ぜひご利用ください！

□ 展示場所：Knowledge Base（神田）うずまき書架  
本館（生田）館内 3F 情報検索コーナー



## フォトジャーナリズムに興味を持った人へ

報道写真が伝える世界、報道写真家の仕事・自伝などフォトジャーナリズムに関する本をご紹介します。

### 紛争・難民・民族問題を知る

写真展の撮影地を含む世界各地で起きている争いごとや人権侵害に関する本を集めました。

### 子どもたちの暮らしについて考える

貧困や児童労働、教育格差など子どもたちの暮らしの現状を知ることができる本を集めています。

### 災害の地で生きるということ

10年前に起きた東日本大震災など、災害の影響を受けた地で生を営み続ける人々の姿について書かれた本を展示しています。

## 写真家・渋谷敦志氏の軌跡

渋谷敦志氏の著作、渋谷氏撮影の写真が掲載された図書、氏が影響を受けた写真家に関する図書を紹介します。

渋谷氏は高校生のときに一ノ瀬泰造の本『地雷を踏んだらサヨウナラ』に出会い、報道写真家を志します。また、ベトナム戦争取材中に亡くなった沢田教一や、水俣病を伝えたユージン・スミスらの仕事にも憧れました。大学2年生のときに、大阪で開催された写真展「WORKERS」で写真家セバスチャン・サルガドの作品世界と出会ったのは決定的でした。サルガドのような報道写真家になろう、という思いからサルガドの出身地ブラジルで働きながら本格的に写真を撮りはじめ、渋谷氏の写真家人生は幕を開けました。

#### 一ノ瀬泰造 (1947-?)

佐賀県生まれ。フリーの報道写真家として、バングラデシュ、ベトナム、カンボジアの激動地帯を取材、グラフ誌や週刊誌などに写真が掲載された。26歳の誕生日を迎えたばかりの1973年11月、「地雷を踏んだらサヨウナラ」と友人への言葉を残し、カンボジアのアンコールワットに向かったまま消息を絶つ。9年後の1982年、両親により遺骨が確認された。1978年、写真・書簡集『地雷を踏んだらサヨウナラ』が発刊された。

#### 沢田教一 (1936-1970)

青森県生まれ。1961年、米UPI通信東京支局にカメラマンとして入社し、1965年ベトナムのサイゴン支局に移る。同年、米軍の爆撃を受ける村から逃げるベトナム人母子が川を歩いて渡ってくる姿を撮影した写真「安全への逃避」が世界報道写真コンテスト大賞を受賞。1966年にはピューリッツァー賞を受賞した。1970年10月、取材先のカンボジアで銃撃を受け34歳でこの世を去る。

#### ウィリアム・ユージン・スミス William Eugene Smith (1918-1978)

アメリカ合衆国・カンザス州生まれの写真家。10代より「ニューズウィーク」や「ライフ」誌などで活躍した。第二次世界大戦の沖縄戦に従軍取材して重傷を負い、後遺症に生涯悩まされた。1971-1974年、日本の公害病「水俣病」を現地に暮らしながら取材。当時の妻アイリーン・美緒子・スミスとの連名で1975年に写真集『MINAMATA』英語版を発表し、水俣病の実態を世界に伝えた。現在公開中の映画「MINAMATA-ミナマター」は、この写真集を原案に制作された。1978年死去、写真集『MINAMATA』が遺作となる。日本語版はその後1980年に出版された。

#### セバスチャン・サルガド Sebastião Salgado (1944-)

ブラジル出身の写真家。1969年、軍事政権下のブラジルを逃れてフランスに亡命。経済学を学びエコノミストとしてロンドンの国際コーヒー機構で働いたが、アフリカ訪問をきっかけに1973年フリーランスの写真家へと転身した。現地に赴き、撮影対象と共に生活したり、手や膝を地面につけて動物にアプローチしたりするなど、時間をかけて被写体に向き合う密着した取材スタイルで、数々の緻密かつ美しい作品を生み出す。人々の苦悩や人間の尊厳、種の起源の撮影に取り組み続けている。



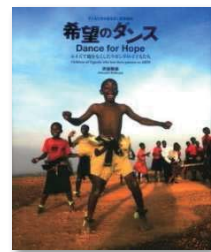
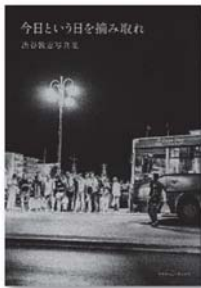
1975年大阪生まれ。立命館大学産業社会学部、英国London College of Printing 卒業。高校生のときに一ノ瀬泰造の本に出会い、報道写真家を志す。大学在学中に1年間、ブラジルの法律事務所で働きながら本格的に写真を撮りはじめる。大学卒業直後、ホームレス問題取材したルポで国境なき医師団日本主催1999年MSFフォトジャーナリスト賞を受賞。それをきっかけにアフリカ、アジアへの取材をはじめ。著書に『まなざしが出会う場所へ—越境する写真家として生きる』(新泉社)、『回帰するブラジル』(瀬戸内人)、『希望のダンス—エイズで親をなくしたウガンダの子どもたち』(学研教育出版)。共著に『ファインダー越しの3.11』(原書房)、『みんなたいせつ—世界人権宣言の絵本』(岩崎書店)などがある。JPS展金賞、視点賞などを受賞。現在は「境界を生きる人びとを記録し、分断を越える想像力を鍛えること」をテーマに世界各地で撮影を続けている。



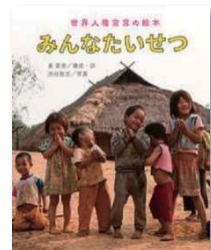
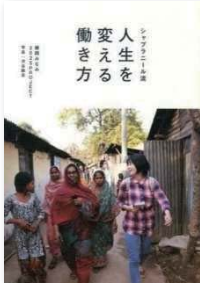
最新写真集『今日という日を摘み取れ』をサウダージ・ブックスより刊行。

2021年、日本写真家協会主催「笹本恒子写真賞」を受賞。

〈著書〉



〈共著〉



オンラインアンケート ご協力をお願い

企画展をご鑑賞いただきありがとうございます！  
今後の参考にさせていただきますので、  
アンケートにご協力をお願いいたします。  
<https://forms.gle/faYpWKqH5zgd2tQB8>



秋の企画展 「Beyond Borders—渋谷敦志写真展」

発行日：2021年10月22日  
編集・発行：専修大学図書館